



学校だより 1月号

文京区立第一中学校 令和7年1月24日（金）

言葉

校長 田島佳子

故事成語：中国の古典に記された昔あった出来事が元になっている言葉。

お正月に娘や孫とかるたをしました。「犬棒かるた」と「ことわざかるた」などです。教訓的なものもあります。中には、各地域の特産物や特徴を盛り込んだ地理かるたや歴史人物かるたというものもあるようです。今は本当に一人でタブレットやスマホを見ている時間が多く、みんなで何かをやるということが減ってきています。確かにリビングに皆が集まってはいるのですが、それぞれが別のことをしています。テレビをみんなで見て笑い合うというのも少なくなっているように感じます。せっかくみんなが休みで集まっているのに寂しいなと思い、しまつてあったかるたを出してみんなでやろうと誘ったのですが、「えー、やだ。面倒くさい。」と言われてしまいました。それでも「やるよ!」と札をまいて準備をしました。やり始めたら、楽しかったのか、他の種類はないの?と言うことで探してみたら、なぜか「四字熟語かるた」というのが出てきました。これも面白かったです。かるたが終わって、娘と、ことわざや慣用句、四字熟語について、こんなのが好き、あんなのがいいよね、などと話しているうちに、ふと昔のことを思い出しました。国語の資料集に故事成語がたくさん出ているページがありました。私はなぜかその中の「人間万事塞翁が馬」という故事成語が気になりました。この故事成語の元になった中国の物語も載っていました。当時家に帰って父親にこの言葉を知っているかと尋ねた時に、成り立ちとなった物語を話して聞かせてくれました。父の理解していた話なので少し脚色されているかもしれせん。でも、物語として面白かったので、今でも覚えています。

昔々、中国に塞翁というおじいさんが住んでいた。馬を持っていたが、逃げられてしまった。周りの人たちは、「かわいそうに」と憐れんでいたが、おじいさんはあまり気にしていなかった。数ヶ月後、その馬が別の一頭を連れて戻ってきた。周りは、よかったとよろこんでいたが、おじいさんはそうでもなかった。その馬に乗っていた息子が馬から落ちて、足が不自由になってしまった。また、周りの人たちは「かわいそうに」と憐れんだ。数年が経ったころ、戦争が起こり、村の若者は次々と戦地へ赴いた。息子は足が不自由だったので、戦地に行くことはなかった。このように、何が幸いするかわからない。悪いことが起きても、ずっとそれが続くわけではない。良いことも同じ。「禍福はあざなえる縄のごとし。」だから悪いことが起きても動揺せず、良いことがあっても調子に乗らずに、ありのままを受け入れることが大事だというようなことを言っていました。なぜかこの故事成語に私は人生の節目を支えられてきました。

皆さんにも、きっと好きな言葉や大事にしている言葉があると思います。

巳年 (みへび)

2025年は、巳年です。蛇は脱皮をして大きく成長するので、縁起がいい生き物です。生まれて1年の人の成長も目を見張るものがあります。中学生くらいになると、なかなか成長がわかりづらけれど、見えないところで必ず成長しているから、努力は大事です。という話を始業式にしました。



授業の様子



自由進度学習

先生達の研修会



書初め

